





役員

役員





| | | |
|--------|---|---|
| 所属・職位 | 学長 |  |
| 氏名 | 北野 正剛 (Kitano Seigo) | |
| 取得学位 | 医学博士、九州大学、1981年3月 | |
| SDGs目標 |    | |

| | |
|---------|---|
| 研究分野 | 消化器外科学 |
| 研究キーワード | 腹腔鏡下手術、内視鏡外科、胃癌、大腸癌、消化器内視鏡、抗がん剤脱毛、化粧品療法 |



| | |
|------|--|
| 研究内容 | <p>●進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術の有用性に関する臨床試験 進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術と開腹手術の手術成績を比較した多施設共同無作為化比較試験にて腹腔鏡下手術が標準治療である開腹手術と治療成績が同等であり、腹腔鏡下手術が低侵襲かつ良好な治療成績であることを明らかにした。本臨床試験結果により、大腸癌治療ガイドラインでは進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術が標準治療として記載されることとなった(論文1)。</p> <p>●世界初の腹腔鏡下幽門側胃切除術の開発 1991年に世界で初めての腹腔鏡下幽門側胃切除術を行い、その成績を発表した。またその後は胃癌に対する腹腔鏡下手術の指導的立場として様々な臨床試験をおこなった(論文2)。</p> <p>●わが国への内視鏡的肥満治療および外科的肥満治療の導入 大分大学で本邦初の内視鏡的胃内バルーン留置術を行った後、肥満治療に外科的治療を導入するなど、本邦の肥満外科治療の指導者として数々の報告を行った(論文3)。 また、日本消化器外科学会ならびに日本内視鏡外科学会の理事長・名誉理事長として本邦の肥満外科治療の現状について報告した。</p> <p>●我が国への新たな治療法の導入(食道静脈瘤硬化療法と内視鏡外科) 食道静脈瘤硬化療法の開発；食道静脈瘤に対する手術療法は死亡率も高く予後不良であったことからケーブタウン大学留学を契機に新たな硬化療法の開発に邁進した。現在内視鏡的治療が標準治療となった(論文4)。 内視鏡外科の開発；偉大な外科医は大きな切開を行うという概念を覆す外科の大きな変革に関わった。日本における導入から国際展開までこれまでの発展を紹介した(論文5)。</p> |
|------|--|

| | |
|---------------|---|
| 研究業績・アピールポイント | <p>●研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> Kitano S, et al. Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404); a phase 3, randomised controlled trial. Lancet Gastroenterol Hepatol 2(4): 261-268, 2017 Kitano S, et al. Laparoscopy-assisted Billroth I gastrectomy. Surg Laparosc Endosc 4(2): 146-148, 1994 北野正剛. 食道静脈瘤硬化療法の黎明期, 消化器外科21(2):143-151, 1998 北野正剛. 内視鏡外科の黎明期から現在に至るまでの苦勞, 消化器外科 41(13):1733-1745, 2018 <p>●アピールポイント 1990年、西日本で最初に腹腔鏡下胆嚢摘出を開始し我が国初の内視鏡外科トレーニングコースを開催するとともに、1991年には世界初の腹腔鏡による胃がん切除術を施行し、その後現在に至るまで多くの教育活動に従事している(国内受講者約6,500名)。アジアを中心にAPSDE(The Asian Pacific Society for Digestive Endoscopy-メンバー: 24か国の専門学会)とMESDA(Mekong Endo-Surgery Development Association)の会長として多くの教育プログラムと実地訓練を現地で開催している(受講者約2,500名)。最近では抗がん剤の副作用による容姿の変化に悩む患者さんの社会活動支援のための内閣府認定公益社団法人等の理事長として大手企業と協働し化粧品療法の開発や普及に努めている。</p> |
|---------------|---|

役員


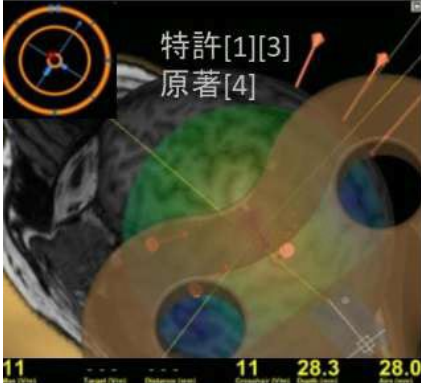

| | | |
|---------------|--|---|
| 所属・職位 | 総括理事（企画・戦略，医療・病院担当）・副学長 |  |
| 氏名 | 杉尾 賢二（Sugio Kenji） | |
| 取得学位 | 医学博士、九州大学、1988年3月 | |
| SDGs目標 |    | |
| 研究分野 | 腫瘍外科学、分子生物学 | |
| 研究キーワード | 肺癌、癌遺伝子、分子標的治療、がん免疫治療 | |
| 研究内容 | <ul style="list-style-type: none"> ●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の耐性に関する研究 肺癌の標的分子、上皮成長因子受容体 (EGFR) 遺伝子変異の高感度スクリーニング法を開発し、チロシンキナーゼ阻害剤 (TKI) に対する感受性変異と新たな耐性変異を見いだした。現在、感受性と耐性を規定するバイオマーカーの探索研究を推進し、さらに多施設共同臨床試験にて標準治療のエビデンス創出と個別化治療の推進に努めている。 ●肺癌の周術期治療の開発 局所進行肺癌（IB期～IIIA期）の手術成績はいまだ満足のいくものではなく、手術前後の薬物／放射線治療により治療成績を向上させる必要がある。殺細胞性抗癌剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などの新規薬物の臨床試験を企画・参画し、新たな標準治療のエビデンス構築に努めている。 ●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発 内視鏡手術（胸腔鏡手術）やロボット支援下手術などを臨床に取り入れ、低侵襲手術の提供を図っている。また、それらの術式開発をすすめている。 ●肺癌、大腸癌、膵臓癌の多段階発癌に関する研究 肺癌の多段階発癌に関与する遺伝子を同定し、癌遺伝子、腫瘍抑制遺伝子、細胞接着因子などの遺伝子変化と癌の進展・予後などとの関係を解明した。また、Epigeneticの観点からメチル化解析の共同研究を米国と行い発癌との関係を見いだした。 | |
| 研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> ●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の開発（論文） <ol style="list-style-type: none"> 2021年、Osoegawa A, ..., Sakai K, Nishio K, <u>Sugio K</u>. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR-TKIs including osimertinib. JTO Clin Res Rep. 2:100191 2021年、Sakai K, ..., <u>Sugio K</u>, et.al. Tumor mutation burden as a biomarker for lung cancer patients treated with pemetrexed and cisplatin (the JIPANG-TR). Cancer Sci. 112:388-396 2018年、Hashimoto T, Osoegawa A, Takumi Y, Abe M, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, <u>Sugio K</u>. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. Lung Cancer. 124:241-247 J ●肺癌の周術期治療の開発（論文） <ol style="list-style-type: none"> 2022年、Tada H, <u>Sugio K</u>, et.al. Randomized phase III study of gefitinib versus cisplatin plus vinorelbine for patients with resected stage II-III non-small-cell lung cancer with EGFR mutation (IMPACT). J Clin Oncol. 40:231-241 2022年、Takahashi T, <u>Sugio K</u>, et.al. Predictive value of EGFR mutation in stage II/III non-squamous NSCLC patients treated with platinum doublet postoperative chemotherapy. Cancer Sci. 113:287-296 2021年、Yamaguchi H, ..., <u>Sugio K</u>. A Phase II Study of Osimertinib for Radiotherapy-Naive Central Nervous System Metastasis From NSCLC: Results for the T790M Cohort of the OCEAN Study (LOGIK1603/WJOG9116L). J Thorac Oncol. 16:2121- 2132 ●受賞 1. 2006年、日本肺癌学会 篠井・河合賞 | |

役員

| | | |
|--------|---|---|
| 所属・職位 | 理事（教育、学生・留学生支援担当）・副学長 |  |
| 氏名 | 古賀 精治 (Koga Seiji) | |
| 取得学位 | 教育学修士、九州大学、1987年3月 | |
| SDGs目標 |  | |

| | |
|---------------|--|
| 研究分野 | 特別支援教育 |
| 研究キーワード | 脳性麻痺、動作法、心理リハビリテーション |
| 研究内容 | <p>●新奇的動作の学習に関する心理学的研究 人が経験したことのない新たな動作を学習する過程について研究しています（論文1・2・3、著書1・2）。</p> <p>●脳性麻痺児・児への動作法の適用の効果に関する研究 脳性麻痺のある人に動作法を適用し、動作不自由の改善に関する効果を検証しています（論文4・6・7）</p> <p>●動作法の指導者の力量向上に関する研究 動作法を実践する指導者の力量をどのようにすれば向上できるかについて研究しています（論文5、著書3・4）。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1988年、筋電図バイオフィードバックによる新奇的筋活動の制御の獲得、心理学研究、Vol. 59(3) 1989年、Acquisition of self-control of a novel muscular activity with EMG and video feedback、Perceptual and MotorSkills、Vol. 69 1991年、新奇的筋活動の制御の獲得における気づきと筋電図バイオフィードバック、心理学研究、Vol. 62(5) 1992年、A case study of “gait training” for cerebral palsied child、The Journal of Rehabilitation Psychology、Vol. 19(1) 1995年、臨床動作法における訓練者の力量の評定尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討、特殊教育学研究、Vol. 33(3) 2002年、脳性マヒ者に対する動作法の効果に関する運動力学的分析、特殊教育学研究 Vol. 40(2) 2005年、Effects of dohsa-hou (Motor Action Training) on adult with cerebral palsy、 Saudi Journal of Disability and Rehabilitation Vol.11(2) <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1992年、アクティブに生きるー自己活動の心理学ー、ソフィア 2000年、現代のエスプリ別冊ー実験動作学（からだを動かす心の仕組み）ー、至文堂 2003年、講座・臨床動作学IVー教育動作法ー、学苑社 2015年、基礎から学ぶ動作法、ナカニシヤ出版 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2008年、第22回大分合同新聞福祉賞 2016年、平成28年度日本リハビリテーション心理学会賞 |

役員

| | | |
|---------------|--|---|
| 所属・職位 | 理事（研究，産学連携担当）・副学長 |  |
| 氏名 | 藤木 稔 (Fujiki Minoru) | |
| 取得学位 | 医学博士、大分医科大学、1990年3月 | |
| SDGs目標 |   | |
| 研究分野 | 脳神経外科学 | |
| 研究キーワード | 神経外傷学、脳卒中、脳腫瘍、磁気刺激 | |
| 研究内容 | <p>1. 神経外傷学を俯瞰的・網羅的病態解析(業績[1][4]) 脳神経外傷・脳卒中は発症直後の急性期のみならず、亜急性期から慢性期に至る病態を俯瞰的に解決する必要がある。重度障害に加え、高次脳機能障害を克服することで真の社会復帰を目指す。</p> <p>2. 脳の磁気刺激を脳神経外科学臨床応用へ(業績[1][2][3][4][5]) 脳腫瘍手術には確実性安全性が必須である。正確な術前脳機能評価を術中・術後経時的に行うことを可能にする新規デバイスを開発した。安全性・有効性の検証後、脳神経外科学臨床応用可能なシステム構築を目指す。</p> <p>3. 神経科学を国際共同研究へ(業績[2][6])</p> | |
| |   | |
| 研究業績・アピールポイント | <p>研究根幹を成す知的財産と原著</p> <ol style="list-style-type: none"> 藤木 稔 非侵襲的ヒト優位半球・大脳運動性言語野機能判定装置 特願2018-137499号 藤木 稔 神経系細胞の増殖を活性化させるための磁気の制御方法、及び脳・運動機能再建システム 新規特許出願中 特願2018-164498; (2018年7月23日; 2018年9月3日出願) 藤木 稔, 磁気刺激コイル 特開2012-187149; (2011年3月8日出願) Fujiki M, W Matsushita, Kawasaki Y, Fudaba H. Monophasic-Quadripulse Theta Burst Magnetic Stimulation for Motor Palsy Functional Evaluation After Intracerebral Hemorrhage. Front Integr. Neurosci. Apr; 2022. Fujiki M, Kuga K, Ozaki H, Kawasaki Y, Fudaba H. Blockade of Motor Cortical Long-Term Potentiation Induction by Glutamatergic Dysfunction Causes Abnormal Neurobehavior in an Experimental Subarachnoid Hemorrhage Model. Front Neural Circuits. Apr 9;15: 670189. 2021. Fujiki M, Yee KM, Steward O. Non-invasive High Frequency Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation (hfrTMS) Robustly Activates Molecular Pathways Implicated in Neuronal Growth and Synaptic Plasticity in Select Populations of Neurons. Front Neurosci. 16; 14: 558. 2020. | |